

環境 NPO の趨勢に関する調査研究  
～特に活動対象としての自然環境フィールドについて～

栗田和弥 [東京農業大学]

わが国の「特定の目的（例えば環境保全、福祉援助、文化支援）に関わる非営利の組織」（以下「NPO」）の活動は、個人として家庭生活（いくなれば第一の社会）や国民の義務としての労働すること（あるいは教育を受けること）（同第二の社会）とも異なり、市民として余暇時間の有効活用あるいは社会貢献の場などとして、行政・企業・個人と共に重要な社会（同第三の社会）を形成しているといえる。それはまた、自己実現が比較的かなえやすい点で、発展してきているといえるだろう。しかし、特に環境問題に対応する「環境 NPO」は、環境教育・自然学習などの啓蒙活動を除けば、形が残る活動として担うべき責務は大きいといえることができる。

ところが、田園（里山）・河川・都市公園・植林・原生自然などそれぞれの活動の成果を報告する事例は蓄積されてきたが、網羅的に趨勢を追究した研究はいまだ見出せない。そこで、本論は「環境 NPO」が活動の対象としている自然環境フィールドに着目し、全国的な傾向を把握することを目指して、現在までにどのような質の自然環境を扱ってきたのかをとって捉え、整理・分析を行った。

野外音楽フェスティバルにおける開催地決定および継続の要因に関する研究  
～フジロックフェスティバルを事例として～

○野々村 潤 [東京農業大学]    △栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：野外フェスティバル、地域、受入体制、来訪者

全国各地で多数の「野外フェスティバル」と呼ばれる屋外で行われる音楽イベント開催されるようになった。大規模なものでは数日間に渡り開催され、国内外の 200 以上ものグループが演奏し、10 以上ものステージがあり、開催期間中は会場内でキャンプも可能である場合もある。フジロックフェスティバルは、初年度となった 1997 年は山梨・天神山スキー場で開催、1998 年は東京ベイサイドスクエアで開催され、1999 年から 2010 年にいたる 12 年間は新潟・苗場スキー場で開催されている。これらの開催地を比較検証し、それぞれの地域が開催地として選ばれ、その後、開催地の継続あるいは変更になって経緯を調査し、野外フェスティバルの開催地を決定する際に求められる要因やその地域に根付くために必要な条件を整理した。その結果、広さ、収容人数、テント幕営数、ステージやトイレの数、駐車場の確保、周辺の宿泊施設、会場へのアクセス、住宅地との距離等が要因・条件となっていることが明らかとなった。